

## 書評：中兼和津次『経済発展と体制移行』名古屋大学出版会、2002年

盛田 常夫

題名の通り、本書は「発展」と「移行」という二つの視点から、中国経済の発展過程を分析すると同時に、ヨーロッパあるいはロシアの「体制移行諸国」と中国の比較分析を目的としている。問題設定は時宜に適合しており、たんに中国経済を研究する者のみならず、現代の「体制移行」を研究する者にとって、本質的な問題を提起している刺激の多い分析書である。

もちろん、筆者と評者との間には基本的な諸点で見解の違いがあり、ここではそれらを中心的に論じるが、筆者の問題提起に大いに触発されたことを前もって記しておきたい。

### 発展と「移行」

評者は「移行」という表現を使用しないが、そのことは後に論じることにし、最初の論点である二つの概念、つまり「発展」と「移行」の区別について論じたい。この問題提起は、まさに中国研究者であるからこそ提起された重要な論点だと考える。まさに、中国では「文明化」を通じた経済発展が、その内実に社会体制の変容を内包しており、「体制移行」よりは長期的な「発展」が顕著に観察されるように思われる。これにたいして、ヨーロッパの「移行経済」の場合には、「システムの転換」が「発展」より顕著に観察される。つまり、アジアとヨーロッパでは、二つのプロセスの有り様が異なるのである。この点の認識はきわめて重要である。

他方、「発展」と「移行」の区別をどう理解するか。この点の筆者の説明は、必ずしも明瞭でない。評者は、「発展」が量的な増加を表現しているのにたいし、「移行」は質的な変化を表現していると考えるが、本書はその二つの違いを明確化するのではなく、その関連性に力点を置いている。そのことは、二つの関係を図示（第一章、図 1-2）した説明から明らかである。すなわち、生産要素の組合せと生産水準の図式にもとづき、「発展」が生産水準の拡大（等生産量曲線の移動）で表示され、「移行」は同一の生産水準における生産要素の組合せ（それによる社会的厚生）の変化として表示される。

筆者の説明は問題提起として興味深く、生産水準の量的変化を「発展」と捉え、生産要素の組合せの変化を「移行」と捉えており、後者が質的な変化であることを暗示している。しかし、それが何ゆえに「質的」変化であるのか。その分析が欠如している。評者は、この図示による例証はひとつの喩えとして利用できるとしても、二つの概念の本質的区別を表現できないと考える。同じ平面上に、質的に異なる二つの概念を例示することはできない。その本質的な点は以下の通りである。

筆者が指摘するように、確かに「移行」は生産要素の組合せの変化を惹き起こすだろう。しかし、それは即時的な変化ではない。社会的関係の変化と変容を通じた歴史的過程の結果として生じるものであり、例証されているような即時的な過程ではありえない。とすれば、「移行」で表現される社会的関係の変化と変容の質的内容を明らかにしなければ、「移行」を説明したことにならない。

「生産要素の組合せの変化」の前提には、国营企業や予算組織から社会の活動の人口を解放するという社会的プロセスが存在する。これをたんに「民営化」と片付けてはならない。社会的活力の解放と再編成は歴史的な学習過程を通して実現していく、長期にわたる複雑な社会的関係の変容過程であって、法的な所有権の変更で実現されるものではない。まさに、このような歴史的な社会的過程が「移行」の本質であるからこそ、評者はその過程を「体制転換」と称するのである。

### 「移行」概念について

これまで叙述したように、本書では「移行」概念と「発展」概念との区別が明瞭でない。評者は開発経済学に不案内だが、もしかして開発経済学では「社会的関係」という質的な視点ではなく、「具体的制度」という観点から分析されるので、「移行」と「発展」の質的区別が不明瞭になるのではないだろうか。つまり、社会的関係の質的变化ではなく、発展を惹起するような「制度の変化」が「移行」を規定するものとして理解されているのではないだろうか。

明らかに「移行」概念には、変化の連続性＝「移動」が暗示されている。「移動」は連続的な概念である。もし民営化を通して、「計画制度から市場制度へ移行する」と考えれば、連続的な移動過程だとみなすこともできよう。まさに、中国がこの有力な事例だとすれば、それは一つの歴史例証だとみなすこともできる。筆者が発展経済学に依拠する中国経済の専門家であることを考えれば、その理解は首肯しうるものである。

このように考えてくると、やはり中国あるいはアジア諸国の発展水準の「移動」として「移行」と、ヨーロッパ諸国の「社会関係の質的变化」である「移行」では、「移行」の質的内容が異なり、別様のアプローチが必要なのではないか。ヨーロッパ型の「移行」は、やはり「質的転換」と規定するのが適切ではないか。そもそも「移行」という概念で、ヨーロッパからアジアまでの変化を表現するのは無理があるのではないか。そのような疑念が生じてくる。逆に、もしアジアとヨーロッパで生じている変化を統一的に理解しようとするれば、もっと抽象的な分析的アプローチが必要ではないのか。まさにそれこそが評者の主張でもある。

### 「計画」とはなにか

そのことに関連して問題を提起すれば、いったい「移行」とは「何から何へ」の移行なのだろうか。「計画」という制度から、「市場」という制度への移行な

のだろうか。社会主義から資本主義への移行なのだろうか。それとも、もっと質的に別様に表現されるものだろうか。

ほとんどの論者は、「移行」であれ「転換」であれば、いわゆる旧社会主義諸国の変化は「計画から市場」への変化であると理解している。しかし、この理解は自明なことであろうか。評者はそう考えない。「電子計算機もない時代に、どのような『計画』が存在したのか」を問えば、「計画」概念の内容がきわめて不明瞭であることがすぐに分かる。いったい、多くの論者が自明の前提としている「計画」とはいったい何か。そして、歴史的に存在した「計画経済」の「計画」とは何だったのか。そのことの本質を分析せずに、「計画」を語ることはできないし、ましてそのような不明瞭な概念を「市場」と対比させることも不可能である。

したがって、何よりもまず、20世紀に歴史的に存在した「計画」の本質を捉えることが、すべての分析の出発点でなければならない。「計画」の本質は何か。評者はこれを「配分（配給）」と捉える。それは理想的な計画化の本質を表現するものではないが、歴史的に存在した「計画」の本質である。評者は『ハンガリー改革史』（日本評論社、1990年）で、歴史的に存在した社会主義は、戦時社会主義を超えるものではなく、その「計画」も「戦時的配給システム」を超えるものではなかったと規定している。まさに「配給統制」こそが、20世紀の「計画」を本質的に表現するものであり、すべての国の「社会主義」社会システムはそこから出発して構築されている。したがって、配給（配分）行為がいかにして独特な社会関係・組織を構築したのかという視点が、分析の本質になければならない。

このような分析の抽象度に対応して、「市場」概念にもさらなる分析を加える必要がある。経済行為としての「市場」の本質は何か。現代のさまざまな市場形態を貫く「市場の本質」は何か。評者はそれを「交換」と捉える。この本質的な把握から出発して、交換関係の発展が創出する社会関係・組織を分析することで、20世紀の「計画」が創出した社会関係・組織との比較分析が可能になる。

もし現代の「移行」を統一的に把握しようとするれば、このような抽象的次元にまで遡って、論理を構築していく必要がある。これがまさに評者が『体制転換の経済学』（新世社、1994年）第4章「再分配・交換・コミュニケーション：システムと経済行為」で展開した論理であり、そのことの妥当性は失われていない。

### 今後の論議を期待

多くの研究者がここで提起された「移行」や「転換」をめぐる問題を看過している。その論議を活性化する意味で、筆者の問題提起は時宜にかなったものと考えられる。筆者と評者の間に存在するようなアプローチの違いは、開発経済学の分析手法と社会哲学的分析手法の違いのように思う。そうした方法論上の違いから生じる理解の差異を含めて議論を呼び起こし、多くの論者が筆者の問題提起に応えていくことが、現代の「移行経済」理解に不可欠だと考える。今後の議論に期待したい。